

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「大阪府、コンビニ雇用セブンと連携」
- 2) 「深刻な企業の後継者不足、一挙に解決するウルトラC？」
- 3) 「超軽量電動アシスト自転車“Maxwell EPO”」
- 4) 「触れる空中ディスプレイ レーザーで空気をプラズマ化」

---

### 1) 「大阪府 コンビニ雇用、セブンと連携」

大阪府は、セブン-イレブン・ジャパンと55歳以上の高齢失業者を対象にコンビニエンスストアで採用するため説明会を開くと発表した。1回目の説明会を6月24日に府南部の羽曳野市で催した。2回目は7月29-30日に府北部の豊中、吹田、池田市で催す。府が4月に始めた企業との連携事業の第1弾。

食事や商品の配達、接客、陳列などの仕事で勤務時間は2時間以上。同社は特に同世代や年配者への弁当配達を仕事の中心に考えており、府は独居老人らの見守り役としても期待している。

同社が自治体との協定に基づいて高齢者雇用を進めているのは福岡県に次いで全国2例目という。

このような取り組みにより、雇用の創出や地域のコミュニケーションカアップを図ることができれば、企業・労働者・地域にとって三方良しだと思う。多くの人におなじみのセブン-イレブンが行うということも安心感につながる。ドミナント形成しているコンビニだからこそできる取り組みでもあると思うので、いい具合に他の地域にも広まってくれればと思う。

---

### 2) 「深刻な企業の後継者不足、一挙に解決するウルトラC？」

ベンチャー企業が創業期に失敗する確率は93%、起業した会社の10年後の生存率はわずか5%などといわれる中、起業のリスクを低減させて成功率を高める手段のひとつとして、「後継創業」がある。

これは、起業家が既存の中小企業の後継者になり、建物、設備、信用、取引先、固定客のような有形無形の資産を受け継ぎながら、自分のやりたいビジネスを始めるというものだ。苗木をそのまま育てるのではなく、「接ぎ木」をして育てるようなもので、土台の木の根や幹（既存企業）の資源を利用して大きくなることができる。

帝国データバンクが2014年7月に公表した「後継者問題に関する企業の実態調査」によると、国内企業約28万社のうち65.4%の約18万社が「後継者不在」と回答している。回答企業の99%以上は中小企業で、そのほぼ3分の2が後継者問題に悩んでいるか、すでにあきらめている。業種別では、建設業とサービス業の後継者不在率が70%を超えている。商店も卸売も町工場も農業も後継者難であり、後継創業の対象企業は無数にある。

このように深刻な問題になっていることから、あまり表には出ていないが多くの地方自治体が後継創業を積極的にバックアップしている。

静岡県では商工会議所に「静岡県事業引継ぎ支援センター」という中小企業の事業継承問題の相談窓口を設置、14年4月から「静岡県後継者バンク」を無料で運営している。

意欲のある起業家と後継者不在の事業主をマッチングさせるという目的で、まさに後継創業のための“お見合いサービス”だ。話がまとまれば、県内の市町村や商工会議所、商工会、起業家育成協会、創業支援センター、移住相談センター、日本政策金融公庫などの関係団体が連携してバックアップするという、起業支援並みの体制を整えている。現在、事業引継ぎ支援センターは16の自治体にあり、中小企業庁は15年度中に全都道府県への設置を目指している。

また、昨年6月に発表された安倍晋三内閣の成長戦略「日本再興戦略 改訂2014」には「創業希望者をプールした『後継者人材バンク』を開設」という項目が盛り込まれ、国も後継創業を後押しする姿勢を明確にした。岡山県、長野県、秋田県、栃木県などで後継者人材バンクが設立されてから1年あまり経過したが、相談事例はそれなりにあるものの、マッチングの成功実績はまだ皆無のようだ。

先行した静岡では昨年の半年間で起業希望者が31人、事業承継を希望する企業が21社現れたが、後継創業の成約実績は結局ゼロだったという。各自治体の後継者バンクも、起業希望者は独立を目指して修業中の料理人が多く、現金商売で店に固定客がついている飲食店は、比較的スムーズに話が進むのではと期待したようだが、実績は上がっていない。

事情はさまざまだが、ネックになっているのは関係者の話ではミスマッチが原因のようだ。それも、ビジネスプランが相いれないというケースより、起業希望者の考え方や能力、人柄が経営者のお眼鏡にかなわないことが多いという。経営者も、苦労して育ててきた会社を後継者につぶされては嫌だろう。そのため、起業希望者に対して要求する水準が高くなるのも無理はない。後継者が子供などの身内や、何十年も一緒に働いてきた幹部であれば、多少のことは目をつぶっても、赤の他人になると妥協できない、ということもあるだろう。

中小企業の経営者は、「後継者がいない」とぼやきながら、一方では後継者候補への要求が多く、求める水準も高い。だからこそ、後継者難が深刻化しているともいえる。自前の起業だけでなく、後継創業も視野に入れている起業希望者は、そうした事情も心得ておく必要がありそうだ。

身の回りでも後継者不足が深刻だという話を耳にする。昔に比べて職業の幅が広がり選択肢が増えた中では、後継というのはますます難しくなると思う。いくら仕組みを作っても人の心まで変えるのは難しいので、この問題はまだまだ続くだろう。会社は経営者1人のものではなく、従業員のものでもあり社会を巻き込む存在であるため、後を継ぎたくなる魅力的な企業を作るといっても求められると思うし、経営者は跡継ぎの育成を思っている以上に早い段階からしていかなければならないと思う。

---

### 3) 「超軽量電動アシスト自転車 “Maxwell EPO”」

Maxwell EPOと名づけられた自転車は、超軽量な電動アシスト車だ。一見ふつうの自転車だが、漕ぐ力は3倍に増強され、倍のスピードが出せるという。

それでいて重量は11.8-14kg。日本のいわゆる“ママチャリ”よりも軽い。したがって、階段があれば持ち上げて運ぶこともあまり苦にならないし、いろいろなところに運べる。そして充電をするのも容易だ。

その軽さやデザインのおかげで、従来の自転車と同じような感覚で使えるいっぽうで、移動時間は短く、そして体力的にも楽になるのだ。

スペックを紹介しよう。最高速は約20MPH（32km/h）。航続距離は16-24km。バッテリー容量は250Wh。90%充電するのに要する時間は45分だ。

この軽さとデザインを実現できたのは、フレーム下部に電動ユニットをコンパクトに収納できたからだ。三角形のフレームの下の角の部分にガセット補強のような三角形のボックスがついていることがわかるだろう。ここにバッテリーなどの電動ユニットが内蔵されているのだ。

様々な体格の人が乗れるように、フレームのサイズはいくつか用意されることになるようだ。また変速機の有無やギヤの段数など、いろいろなカスタムもオーダーできる。

現在のところ、シンプルな変速機なしモデルで、希望小売価格は1800ドルくらいになるようだ。

ただ、電動アシスト自転車は日本のメーカーも得意なジャンルだ。それもブリヂストンやヤマハといった世界に名だたる企業が開発している。10万円を超える商品なので、お手軽に開発しているわけではないだろう。本気のはずだ。

それらと同様にリチウムイオン電池やトルクセンサーなどのハイテク部品を使いつつ、そこからさらに大幅な軽量&コンパクト化ができるほどのイノベーションが可能なのはちょっと疑問だ。耐久性や安全性等で本当に信頼がおけるのだろうか。

電動アシスト自転車というと重たくて本体も大きいというイメージだったが、この製品は本当に電動機付きなのかと驚くほど薄型でデザイン性もある。自転車はガソリンも不要で環境にも優しく便利な乗り物として重宝されているが、やはり長距離の移動には体力がいるので電動がもっと安価になり一般的になるとますます普及するだろう。ただ安全性の面ではあまりスピードが出すぎるのも良くないような気がする。

---

#### 4) 「触れる空中ディスプレイ レーザーで空気をプラズマ化」

「触れられる、タッチできる、3D映像を日本人がつくりだした」というニュースが、今海外でとても話題になっている。空中に映し出した映像を触って操作できるようになっているという。

この技術がさらに進歩すれば、現在のテレビ画面のようなボックス型のディスプレイやキーボードなどの入力用の物体に触る必要がなくなるだろう。まるで映画『マイノリティ・リポート』の世界ではないか。

この技術を開発したのは“21世紀の魔法使い”の異名を持つ筑波大学の落合陽一博士が率いる研究チーム。空中に浮いている光は、プラズマによって作られたものだそうだ。

ただ表示させているだけではない。そのままではエネルギーが強すぎて人体に影響してしまうため、フェムト秒レーザーというパルス（電気信号のようなもの）の短いレーザーを使用して、触れても安全なプラズマディスプレイを実現させている。

おもしろいのは、タッチして視覚的に映像が変化するだけでなく、操作性をもたせているところだ。SF映画のような、空中に浮く光のディスプレイが実現する日も近いのかもしれない。海外からも、様々な驚きのコメントが寄せられている。

確かに様々な用途が考えられるのは事実だろう。街中の掲示板や看板がホログラフィックに代わっていき、メガネを着けなくてもいい3D映画やお化け屋敷、エンターテインメントの世界にも大いに影響がありそうだ。今後どう発展していくのか、期待が高まる。

バック・トゥー・ザ・フューチャーで描かれた「未来」に当たる2015年に、またワクワクするようなニュースが入ってきた。映画の中でしか実現できないようなことが今後どんどん実現していくという可能性を感じるニュースだった。ホログラフィックを活用することで街中のものが視覚的にも変わり、利用者にとってもより分かりやすくシンプルになっていくのではないだろうか。自分が生きている間にぜひ実現して欲しいと思う。